# 「祖国のイデー」の名において
# ダニイル・グラーニン『ピョートル大帝夜話』における「残酷」の弁明

**武田昭文**

## １．作者について

ダニイル・アレクサンドロヴィチ・グラーニン（本名ゲルマン）：1918 年生まれ。ドイツ系ユダヤ人、ペテルブルグ在住。

グラーニンは、1950 年代に長篇《Искатели》（1954）で一躍人気作家となって以来、〈雪解け〉期には《Иду на грозу》（1962）［『雷雲への挑戦』、川上洸訳、勁草書房、1968 年］、70-80 年代には A.アダモーヴィチとの共著《Блокадная книга》（1979-81）［『封鎖・飢餓・人間』、宮下トモ子ほか訳、新時代社、1986 年］、〈ペレストロイカ〉期には《Зубр》（1987）［『ズーブル』、佐藤祥子訳、群像社、1992 年］というぐあいに、ロシア社会に何か大きな変化がおこるたびに、ベストセラー小説をタイムリーに産み出してきた作家である。

グラーニンの小説は、転換期の社会における人々の意識を映し出す「鏡」（または誘導する「教科書」）として興味深い。たとえば、〈雪解け〉期に書かれた《Иду на грозу》は、ソ連社会のエリート層をなす若い科学者たちの生活を明暗とりまぜて描いた――しかし典型的なソ連小説であった（この小説は当時の理工系の学生に「バイブル」のように読まれたという）。また《Блокадная книга》は、グラーニンのジャーナリストとしての才能が発揮されたドキュメント小説で、おそらくソ連戦争文学の最高傑作であるが、同時に〈停滞〉期の人々の意識を大祖国戦争の記憶によって奮い立たせる意味を持っていた。そして〈ペレストロイカ〉期に評判になった《Зубр》は、ソ連時代に迫害された遺伝学者を主人公とした、まさにペレストロイカらしい小説である（モデルの H.チモフェーエフ＝レソーフスキイは 1992 年に名誉回復された）。このようにグラーニンは、そのときどきの時代の要請に答える小説を書いてきた。グラーニンの小説は、20 世紀後半のロシアにおける人々の意識の変遷をあとづけようとするとき、不可欠の資料となるにちがいない。

本稿は、以上のような関心から、グラーニンの新作『ピョートル大帝夜話』（「諸民族の友好」誌、2000 年５－７月号発表）を取り上げて、その「特徴づけ」（характеристика）を行なうものである。

今、なぜ、ピョートルか？この小説は、一体どのような時代の要請に答えて書かれたのか？

今日のロシア社会のメンタリティーを占うつもりで解説を試みたい。

なお、テキストは下記の単行本を使用する。

Гранин Д. Вечера с Петром Великим (Сообщения и свидетельства господина М.) – СПб.: Историческая иллюстрация, 2000.

## ２．作品紹介

### ２－１　物語の設定と登場人物のプロフィール

ペテルブルグ。港に面したサナトリウムの敷地にある、宮殿の廃墟から物語は始まる。

「河岸沿いのサナトリウムの建物は閉鎖されていた。そこには、蝙蝠や、ねずみや、亡霊たちが棲んでいた。

わたしたちは、夕食後、打ち付けられた板をどかし、割れた壷をよけながら、広い大理石の階段を昇り、広間をとおってバルコニーへ向かった。わたしたちは空壜のかけらを踏んでいった。床には、紙コップや、煙草の吸殻が散らばっていた。リノリウムは剥がれ、間仕切りは取り除けられ、壁際に鉄製のベッドが積まれ、壁紙はぼろぼろだった。昔の宮殿は、すっかり荒廃していた。大広間の古い暖炉は空壜で埋まっていた。糞尿と、腐敗の臭いがした。

バルコニーへ出た。公園から暖かい空気が昇ってきた。海が見えた。水平線の暗い断崖に、夕暮のペテルブルグの赤い陽が燃えていた。

公園の滝の音がした。

モロチコフは、ピョートルとエカテリーナの時代に、ここを歩いていた者たちの話をした。彼は、そうした人たちをよく知っていた。

亡霊たちは時どき公園へ降りてきた。石造りの東屋で彼らの姿を見かけることがあった」（６頁）

廃墟は、ソ連崩壊後のロシアのメタファーであろう。

また、そこに集う人物たちも、ソ連時代の亡霊めいている。

登場人物のプロフィールをまとめてみよう。

モロチコフ：元教師。ピョートル大帝の崇拝者。ピョートルの人生の出来事をまるで見てきたかのように語る。本書の副題「M 氏の報告と証言」は彼からとられている。

チェリューキン教授：昆虫学者。ピョートル神話に懐疑的で、元教師の話に異論を呈する。

アントン・オーシポヴィチ：高級官吏。ピョートル時代の逸話に似たソ連時代の裏話を披露する。

ゲラスキン：遠距離トラックの運転手。消えゆくプロレタリアの代表を自負する。

セリョーガ・ドレーモフ：劇場の舞台装置係。優柔不断な知識人。元教師の情熱を羨む。

わたし：本書の語り手にして、『夜話』を見守っているなにか。

これらの人物は、それぞれ「教師」「教授」「官吏」「労働者」「知識人」のアレゴリーである。

物語は、元教師モロチコフの語るピョートル大帝の話と、それをめぐる旧ソ連の階級代表の議論が交互に行なわれるかたちで進行し、「わたしたち」はピョートルの生涯を最後までたどってゆく。

こうして『夜話』は、ピョートルに関するアネクドートの集成と、それに対する現代的な批評という性格をおびる。

このような物語の骨組みに対し、いわば肉付けとして作者の意匠が凝らされるのが、案内係であるモロチコフの話における「オリジナル・アネクドートからの逸脱」と、質問係である登場人物たちの議論における「現代ロシア人の意識の反映（または誘導）」である。

まず、「現代ロシア人の意識の反映（または誘導）」のほうから見てみよう。

冒頭ちかく、次のような一節がある。

> 「わたしたちは、政治家の私生活の暴露にも、おのれの無力な憎しみにもうんざりしていた。憎しみは調味料としてなら結構である。が、いまどきの盗人どもの仕業を思うと、憎しみを通り越した憎悪で、わたしたちは食中毒になった。やつらのことなど、聞きたくなかった。
>
> わたしたちには昔の話のほうが面白かった。ロシアがまだ若く、酵母入りのパン生地みたいに膨らんでいたころの話が……モロチコフは、そうした時代のことを、情熱的に、何か独特の調子で話した」（９頁）

ここには今のロシアの人々の意識がうまく述べられている。それは、現在への失望と、美化された過去への憧れである。「英雄待望の雰囲気」といってもよい。ピョートルの物語を始めるには恰好のお膳立てである。

次に、モロチコフの「何か独特の調子」ということに移ろう。「オリジナル・アネクドートからの逸脱」に関わる部分である。というのも、彼は、ピョートルに関するアネクドートを紹介するばかりでなく、自分の話を「あたかもすべて目撃してきたかのように」語る点において、みずからもアネクドートを「創作」する語り手だからだ。

元教師の設定は、どこか怪談めいた色合いを物語に添えている。

> 「ロシア美術館からモロチコフに依頼があった。最近、ある町で古い肖像画が発見されたので、誰の肖像画か見てほしいというのだ。このような依頼は、これがはじめてではなかった。どういうわけか、モロチコフは、ピョートルの取巻きを描いた絵がすぐに分かるらしいのだ。美術館の職員は、ヴィターリイ・ヴィケンチエヴィチは知っているのだといった。どうしてそんなことが可能なのか、彼らは、「くわばら、くわばら」というだけで、言葉を濁して答えなかった。モロチコフには、蒐集家からも依頼があった。時どき彼は、（依頼主がいうには）「思い出す」ために、肖像画を家に持ち帰ることがあった。
>
> 今回の「鑑定」は早かった。モロチコフはわたしたちに、それが若き日のヤコブ・シテーリンだと一目で分かったといった。このペテルブルグのドイツ人は、自分の父方の遠い先祖なのだともいった。かつてモロチコフは、シテーリンを研究していた。シテーリンこそが、モロチコフをピョートルに近付けたのだ」（13 頁）

このようなモロチコフの奇妙さについて、納得のゆく説明が与えられることはない。

彼は、妄想に生きる狂人なのか？　あるいは本当に、この世とあの世を行き来する亡霊

なのか？

モロチコフの「異常な知識」は、シテーリンの未公開資料を持っているためだろうといわれるが、その憶測は、彼の話の「何か独特な調子」を十分に説明するものではない。

『夜話』を読む楽しみのひとつは、オリジナル・アネクドートに基づく「実」の部分と、そこから逸脱する「虚」の部分の、メビウスの輪のようにねじれた関係をたどることにあるといえる。

## ２－２　新しいピョートル像の試み

これまでに、三人のロシアの大作家がピョートル大帝の「文学化」を試みている。

プーシキン『ピョートル史（草稿）』（《История Петра》, 1834-35）、A.H.トルストイ『ピョートル一世』（《Петр Первый》, 1929-45）、そしてトゥイニャーノフ『蝋のペルソナ』（《Восковая персона》, 1932）である。

これらの試みは、それぞれ対照的な性格を示している。

まず、プーシキンが取った方法は、ピョートルに関するアネクドートの抜き書きを作り、それに注釈を付けるというものだった。プーシキンは、そのノートをもとにピョートル伝を書こうとしたが、「何かが邪魔をして」書き上げることができなかった。

A.H.トルストイの小説は、スターリン体制の強化に寄り添うプロパガンダ的作品であり、強力で苛酷な改革者を正当化する、ピョートル礼讃の書となっている。

トゥイニャーノフの小説は、A.H.トルストイの小説とまったく対照的である。トゥイニャーノフの描くピョートルは、もっと複雑で恐ろしい。そして小説自体も、人間の尊厳の蹂躙というテーマを掘り下げている。

これらにおいて、いずれの作家をも悩ませたのがピョートルの「残酷さ」という問題である。この問題に直面して、プーシキンはそれを正当化することができず、ピョートル伝を放棄した。

ピョートルに惹かれながら、しかしピョートルを礼讃することを拒んだプーシキンの複雑な感情は、物語詩『ポルタヴァ』（1828-29）の次の一節に端的に表れている。

… Его глаза
Сияют. Лик его <u>ужасен</u>.
Движенья быстры. Он <u>прекрасен</u>.
［……彼の目は
爛々と輝く。その顔は<u>恐ろしい</u>。
動きは速い。彼は<u>美しい</u>］

ピョートルの「残酷さ」に対してどのような態度を選ぶかが、ピョートルを「文学化」するときの踏絵なのである。A.H.トルストイが選んだのは、それを「弁明」することであり、「肯定的なピョートル像」を描くことであった。逆にトゥイニャーノフが選んだのは、そのまえで「逡巡」することであり、「ピョートルとその統治の否定面」をも描くことである。

このようにグラーニンには、ピョートルにアプローチする三つ（厳密には、A.H.トルス

トイか、トゥイニャーノフかの二つ）のモデルが与えられていたわけである。そして現に、『夜話』は、A.H.トルストイのモデルとトゥイニャーノフのモデルのあいだで揺れ動くグラーニンの姿を随所に表している。

では、グラーニンは、どちらのモデルを選び取ってゆくのだろうか？

それとも彼は、A.H.トルストイとも、トゥイニャーノフとも異なる、新しいピョートル像を描くことに成功するだろうか？

『夜話』のピョートル物語は、ピョートルが幼年時代に体験したトラウマから説きおこされる。

このアプローチは、A.H.トルストイの方法をそっくり踏襲したものである（『ピョートル一世』、第1部、第1章19節）。そこでは、銃兵隊の乱（1682年）が幼いピョートルの心に残した傷について、次のような解釈が行なわれる。

「少年の明るく善良な気質はひび割れた。……彼の魂には悪魔が棲みついた」（41頁）

ちなみに、ピョートル少年が「明るく」「善良」であったことを証言する記録はない。

これはA.H.トルストイとグラーニンの純然たる創作である。ここに隠された論理とはこうだ――「ピョートルは子供のときに残酷な体験をした。だから彼も残酷になったのだ」（ピョートルは犠牲者であり、悪いのは銃兵隊である）。と、このように「残酷」の弁明に早くも布石が打たれる。

さらにグラーニンは、ピョートルの幼時体験から、「祖国への奉仕」という思想の芽生えに関する物語を創作する。

「イヴァン・ナルィシキンの逸話は、銃兵隊の乱における一連の出来事の中にかすんでいる。実際、大貴族マトヴェーエフも、ロモダーノフスキイ公爵も殺され、犠牲者の数は厖大であった。イヴァン・ナルィシキンの姿は、叛乱の狂躁のさなかに一瞬だけ輝いて消えていった。誰もピョートルの運命において彼が果たした役割に気付かなかった。もし彼が、叛乱兵のところへ行くことを拒んでいたら、殺戮はさらに続いていただろう。それだけでなく、イヴァンは、拷問にも屈せず、乱を続ける口実を与えなかったことで、ピョートルを二度救ったのだ。

イヴァン・ナルィシキンは、皇帝のためにおのれを犠牲にする忠臣として行動した――このような心理は失われて久しい。彼にとって十歳の甥は、何よりもまずロシアの皇帝であり、わが身を惜しまず、信仰と真実をもって仕えるべき主人だったのだ」（42頁）

これを語っているのは元教師モロチコフである。このことから、モロチコフがA.H.トルストイのモデルに追随するイデオローグであることが判明する。

しかし作者グラーニンは、ソ連時代の（それもスターリン体制の）イデオロギーに単純に追随してゆくわけにはいかない。そこで、異論を述べる者が必要となる。それがチェリューキン教授である。『夜話』においてグラーニンは、二人の登場人物（モロチコフとチェリューキン）の仮面をかぶって、ピョートルに対する肯定的評価と否定的評価を闘わせる。

両者の論争がどちらの勝利へ帰してゆくかが、この小説の大きな眼目である。
はじめのうち、モロチコフとチェリューキンの力関係は拮抗している。
二人の論争を、「ピョートルと女性たち」をめぐる議論から紹介しよう。
このテーマは、A.H.トルストイにはなかったものであり、ポスト・ソ連時代のピョートル物語だから可能になった、グラーニンの『夜話』の新味である。
最初に登場するのは、アンナ・モンスである。
外国人村におけるアンナとの情事は、若きピョートルの伝記における華やかな逸話のように見られがちだが、実際は後味の悪い結末を迎えている。大使節団の帰国後、愛人の浮気を知ったピョートルは、彼女を自宅監禁し、謝罪を待ったが、アンナは反抗し、別の男性と結婚する許可を求めた。彼女は、それを数年後に勝ち取る。

> 「皇帝を愛するには頭の中に皇帝を持たねばならぬという格言は、ピョートルの自尊心を守り、廷臣たちを満足させたが、教授の反論を呼び起こした。
> ――アンナ・モンスはりこうでないかもしれんが、わたしは好感をおぼえるな。ピョートルがつきまとったのもうなずけるよ。彼女は強欲だといったね。それじゃあなぜ、皇帝の慈悲を拒んだんだ？　それはつまり、皇帝の寵姫として手に入るものすべてを拒んだということじゃないか？　おそらく、彼女は傷ついていたか、ドイツ公使を本気で愛していたのさ。怒った皇帝の恐ろしさは分かっていたろうに、彼女は勇敢だよ。痩せたびっこのドイツ人のほうが好きだと公言したんだからな。あっぱれだ！みんなのまえで、あなたのご贔屓の美男子に一発くらわせたのさ！」（74 頁）

この教授の言葉を受けてモロチコフは絶句する。「何もかもがそれまでとはちがったふうに見えてきた」からだ。
アンナ・モンスの章で導入されるのは、ピョートルが生涯、人を愛することも、人に愛されることもなかったという「愛の不毛」のモチーフである。小説の主人公としてのピョートルを真っ黒に塗りつぶしかねない、この危険なモチーフに、グラーニンがあえて言及していることは評価できる。これについては、ピョートルとエカテリーナの関係を描いたリヴォニア女の章で再び取り上げることとし、次に、「残酷」のテーマについて見てゆこう。
1702 年、ノッテンブルグ要塞を包囲するロシア軍に、敵軍の司令官の妻と全将校の妻を代表して、「すさまじい砲撃を逃れるために女子供を要塞から解放してほしい」と懇願する手紙が届いた。

> 「手紙を読み終えると、砲兵大尉（ピョートル）は守備隊付きの淫売たちを口汚く罵った。そして、みずから口述して、「スウェーデンの御婦人方が夫君との別離を悲しむのは忍びぬ故」、応じることはできぬと返答した」（86 頁）

このピョートルの振舞いを弁明する余地はない。当時は激戦区から女子供を避難させることが慣例であったのだからなおさらである。さらにピョートルは、敵軍の妻たちの懇願を拒絶するだけでなく、侮辱を浴びせている。
こうしたピョートルの一面こそが、プーシキンにその伝記を書くのをためらわせたので

ある。
ところが、『夜話』においては、この逸話は意外な方向へズレてゆく。

「ピョートルの返答は、アントン・オーシポヴィチの共感を呼んだ。
——立派な外交官だ！　上手に断るのがいちばん難しいんだ」（86 頁）

驚いたことに、誰もこの官吏の発言に異議を唱えようとしない。まるでピョートルの行為をよしとしているかのようである。作者は黒を白といいくるめようとするが、読者は納得しない。
似た例は多い。

「ピョートルの思いつきはとどまるところを知らなかった。浮かれ会議のメンバーたちも悪ふざけを競った。破目をはずした人々は、機知と破廉恥をいっしょくたに混ぜ合わせた。総主教は、その高みから、宴席へ、高官の頭へ、彼らの鬘へ、小便をふりそそいだ。一同は大はしゃぎだった」（108 頁）

だが、これが「思いつき」（выдумка）だろうか？　否、「野蛮さ」（дикость）というべきだろう。このような首を傾げたくなるすりかえが積み重なって、『夜話』はピョートルに対する批判的視点を後退させてゆく（この傾向は、とくに登場人物たちの議論の質の低下に著しい）。
そして「わたしたち」の沈黙に反比例するように、モロチコフのピョートル擁護の声が響きわたる。元教師が抗弁に努めるのは、ピョートルの「残酷さ」という「誤解」を解くことである。

「おお、もしも人々が、我々の知っている彼（ピョートル）の寛大さを知ったならば、どれほど驚くであろうか。——と、ナルトフは書いている。彼はそれを最後までいいきらなかった。
彼をひどく憤らせたのは、皇帝の無慈悲に関する評判である。
文書を整理しはじめたとき、ナルトフは、皇帝に対して企てられた陰謀の数に慄然としたという。しかし、ピョートルの側近にあった者は、誰も君主の残忍さを非難することなど思いも及ばなかっただろう。人々は、彼がなにを耐え忍び、いかなる不正に目をつむり、どれほどの失敗と犯罪を許したか知らないのだ」（115 頁）

裏返していえば、ナルトフ以外にピョートルの「寛大さ」について記しているアネクドート作者はいないのである。
今度は、「残酷」のテーマに「ピョートルと女性たち」のテーマを重ねて見てみよう。
リヴォニア女の章である。
エカテリーナは、激昂したピョートルをなだめる特別な才能を持っていた。それはほとんど催眠術のようだった。彼女はまた、ピョートルが歳とともに惹かれるようになった家庭的雰囲気を作り出すことにも成功した。宮廷での影響力も強まった。がピョートルは、

彼女に分をわきまえさせることを忘れなかった。頬を張り、拳で殴った。彼は彼女を愛したが、それは馬や犬に対するような愛だった。
エカテリーナは、ピョートルの晩年、彼を裏切り、若い廷臣のモンス（アンナの弟）と密通する。モンスは処刑される。

「1718 年、ベルリンで彼（ピョートル）は、古銭と古代彫刻の間を訪問した。大勢の従者に伴われて、彼は陳列品を見て廻り、婚礼の床に置かれた古代ローマの神の前で立ち止まった。大理石の像は勃起していた。ピョートルは大笑いすると、エカテリーナにむかって男根に接吻するよう命じた。皇妃は恥じらい、否々した。彼は激怒して、無理やり彼女の口に大理石の性器をねじこんだ。そうして妻に指図しながら、この性技についてドイツ語とオランダ語で講釈した。廷臣たちはスキャンダルを喜んだ。が、彼は、周囲の忍び笑いにも、エカテリーナの涙にも注意を払わず、その場で王にこの彫刻を買いたいと申し出た」（169 頁）

ピョートルには、本当になにか悪魔的なところがあったにちがいない。アンチキリストと呼ばれるには相応の理由があったのだ。レーニンも、スターリンも、さらにはイヴァン雷帝ですらも、アンチキリストと呼ばれることはなかった。
トゥイニャーノフの『蝋のペルソナ』を思い起こせば、このピョートルの嗜虐行為は、「涜神」につながる「人間の尊厳の蹂躙」として、登場人物たちに大いに議論されてよいはずである。
ところが、この逸話のあとで、「わたしたち」は黙りこんでしまうのだ。

「誰もがエカテリーナのような女を夢見ていることが分かった……」（170 頁）

これは重要な一節である。なぜなら、ここには現代のロシア人男性の夢がもらされているからだ。
『夜話』が「英雄待望の雰囲気」の中で始まることはすでに述べた。そして物語は、ピョートルがその待ち望むべく指導者のタイプなのだと言い聞かせるように進行する。しかし、それは今ロシアで人々が本当に望んでいることだろうか？　虚勢ではないのか？　本心では、人々（男たち）は、陽気で色っぽく、口答えせずに男を立ててくれる、エカテリーナのような女を求めているのではないか？
だが、このせっかくの視点も、『夜話』では生かされることがない。
ピョートルの「残酷さ」に対する批判的視点を保つことができず、またエカテリーナに対する嗜虐行為を（せめて「愛の不毛」のモチーフと結びつけて）登場人物たちの議論に展開できなかったことで、この物語の中盤においてグラーニンは力尽きているように見える。
もちろん、グラーニンは、ピョートルを単純に肯定することは、プーシキンを裏切ることであり、ひいてはロシア文学における作家の良心を裏切ることであることをよく知っていたであろう。それは、逸話の選び方からも想像することができる。しかし、アネクドート等の記録にあるピョートルを見つめることと、それを小説化することのあいだで、グラ

ーニンは「残酷さ」の問題を持てあまし、自発的な態度を決定することに失敗した。つまり、新しいピョートル像を作り出すことができなかった。そうすると、作家にはなにが残るだろう？　厳しくいえば、それは読者大衆の好みをうかがうことである。今、読者が読みたいと思うピョートル物語とはいかなるものか？　「肯定的なピョートル像」である。それも、A.H.トルストイにおけるソ連臭を取り除き、現代ロシアのイデオロギーにマッチさせた。

グラーニンは読者の欲望に迎合してゆく。ピョートルの敵であるチェリューキン教授は悪役に回され、他の登場人物たちは、いつのまにかピョートルの弁護人に変身する。元教師モロチコフは、今やその肩書きのもうひとつの意味である「師」（учитель）となり、いかにピョートルを崇拝すべきかという教えの「乳」（молочко）を恵む預言者となる。

『夜話』の後半は、新しいピョートル像の試みからの全き退却であり、現代ロシアのイデオロギーへの降伏である。そこからは今日のロシアにおける時代の要請と人々の意識が「鏡」をのぞくように見えてくる。

### ２－３　ピョートルとロシア人

ピョートルの敵であり、モロチコフのライヴァルであるチェリューキン教授の格下げはどのように行なわれるのか？

チェリューキンの設定で注目されるのは、彼がロシアとロシア人を罵ることに目がない「ルソフォビア」だということだ。ピョートルを論じるときのお決まりのテーマである、「ロシアとは何か？」、「ロシア人とは何者か？」という話題は、そうした彼の恰好の餌食となる。

チェリューキンのロシア批判の例を挙げよう。

ピョートルがある司祭に、プッフェンドルフの『ヨーロッパ史序説』の翻訳を命じたところ、司祭は著者がロシア人について辛辣に書いている部分を飛ばして訳した。ピョートルは激怒して、翻訳をやり直させた。しかし、ピョートルの死後、プッフェンドルフの翻訳が刊行されるときには、問題の箇所は検閲で削除されてしまったという逸話に続く一節である。

> 「教授は大喜びで、肘掛け椅子にのけぞり、顔中に満足の笑みを浮かべた。
>
> ――それでこそロシアだ。よそ者に勝手なことをいわせてなるものか。祖国への恩を忘れてはならん。われわれはロシア人に生まれただけで仕合せなのだ。ロシア人は他のどの国民よりも優れておるのだ。誰がいったか知らんが、みんなよく分かっておるわい。
>
> ――ひょっとして、教授はロシアがお好きでないので？――アントン・オーシポヴィチがたずねた。
>
> ――好きもなにも。ロシア人であるからこそ我慢がならんのだ。チェリューキン家といえば、ノヴゴロド年代記にも出てくる貴族の家だ。でもね、嫌いだよ、大嫌いさ。なぜならロシアをよく知っているからだ。森のロシアを端から端まで旅したんだ。外国人がわれわれをどう見てるかだなんて……たまらないよ、おおいやだ。自分で自分を見るのもいやなのに。われわれに自分たちのざまを見せるには、鼻面に突きつけて

やらねばならんのさ。でなければ、何も学習するものか。

教授は、嘆きも怒りもせず、それどころか嬉々として話していた。まるでこの話題が出るのをうずうずしながら待っていたかのように。

――ロシア人を愛してやる理由なんて、どこにある？　教えてほしいものだ。奴隷の民だよ。奴隷根性が染み付いておるんだ。われわれの給仕を見たまえ。愛想のかけらもありゃしない。愚図な下種だ。ロシア人にはみんな三つのGがついておる――ゲスと、グズと、ガキだ。鎖や看守などなくとも、われわれは奴隷なんだ。自由なんて糞くらえ。ここじゃあスターリンがいまだにうやまわれておる。ラーゲリでばかにされ、踏みにじられても、どうってことないんだ。大事なのは、人間を屑だと思うことだ。われわれは喜んで自分が屑であることを認めるだろう。俺たちはネジだ！　俺たちは埃だ！　ネジであることが嬉しくてたまらないんだな。ネジ人間の行進さ。一体、わが民族が、強制されずに何事か成し遂げたことがあるかね？　わたしの別荘は湖の畔りある。毎年ベンチを据え付けるんだが、これが毎年壊される。焚き木にされちまうんだ。ごみ箱を置いても誰も使わない。みんなポイ捨てだ。空壜はたたき割らねば気がすまないし、そこいらじゅう破片が散っている。ゴキブリにどぶねずみ、酔っぱらいにこそ泥、たれこみ屋に監視人というのがロシアの特徴さ。われわれは世界で最も豊かな国における乞食なんだ、それも好きでやってるんだよ。湖と川を汚して、森は伐り放題。炭田はすぐぼた山にしてしまう。国をごみの山に変えて、いまじゃヨーロッパのごみ捨て場になろうという始末だ」（93 頁）

われわれにはお馴染みのクリシェであり、何気なく読んでしまうところだが、このような良識的な意見はやはり「教授」のもので、ロシアの一般読者は、引用の部分から強い不快感をおぼえることを忘れてはならない。

「ルソフォビア」と設定された時点で、チェリューキンはもう悪役だったのだ。

ロシアにこんな言いまわしがある。

Кто не любит Петра, тот не любит русских.

［ピョートルを愛さない者はロシア人を愛していない］

「ピョートルを愛さざる者は人にあらず」である。

チェリューキンは、この言いまわしの戯画であり、はじめから調伏されるべく運命にあったようだ。悪役は悪役らしく悪あがきしてもらいたいが、物語が進むにつれてチェリューキンは簡単に屈服する。それも、ピョートルへの「あわれみ」を喚起されることで。

情緒に訴えるという調伏の手段自体が、悪しき紋切型としてロシア的である。

その次第はのちほど取り上げるとして、ドイツ系ユダヤ人のグラーニンが、非ロシア人ならではのピョートルに対する悪意や嫌悪の交じった視点を分け与えている、この人物をやすやすと調伏させてしまったことは残念である。

### ２－４　今日のロシア社会のコンテキストにおける『夜話』

この小説はどのような時代の要請に答えて書かれたのかという問題に入ろう。

『夜話』は、廃墟を舞台に、現在のロシアに失望して、理想化された過去へ逃避する者たちによるピョートルの物語である。登場人物たちは、みな心のどこかに敗北者の意識を

秘めて、現在の社会にうらみを抱いている。彼らにおける過去への逃避が単純にそれだけですむはずはない。過去に対する現代的な批評であったものは、過去から見た現代への批判に容易に変化してゆく。傷ついた自尊心はちょっとしたきっかけで爆発する。

「まったくなんてあわれなやつらだ。――セルゲイは声をあらげた。――あんたらには何にも残ってないじゃないか。崇め奉った指導者のひとりも残っちゃいない。俺なら魂を清めようとするだろうよ」（177 頁）

もう一度、小説の冒頭へもどって登場人物たちの「怒り」を見てみよう。

「わたしたちは、政治家の私生活の暴露にも、おのれの無力な憎しみにもうんざりしていた。憎しみは調味料としてなら結構である。が、いまどきの盗人どもの仕業を思うと、憎しみを通り越した憎悪で、わたしたちは食中毒になった。やつらのことなど、聞きたくなかった。」（９頁）

この「怒り」は、チェリューキン教授にまで、次のような教授らしからぬ発言をさせる。

「われわれは傷つけられ踏みにじられてばかりだ。悪気なくついなんてこともある。いちいちお返しする必要はない。寛容は美徳だ。でも、分かっていても我慢できないんだ。仕返ししたい、殴り返したい！　今の不正な世の中に復讐したい！　わたしが受けた仕打ちと、人々があわされた目に対して。わたしにとっては復讐がなければ正義もないのだ。わたしは暴力をもって悪に報いないトルストイの無抵抗主義を読んだ。きれいごとさ。深い信仰を持てばよいのかもしれないが、わたしには無理だ。一体誰にできる？　そんな人間に会ったことがない」（139 頁）

だから彼らは、盗人どもが罰せられない今の世に憤りながら、不正と闘うピョートルの物語に胸をわくわくさせて聞き入るのである。

彼らには、ピョートルの「残酷さ」が「魅力」なのだ。

彼らが「残酷さ」に対してどのように反応するか見てみよう。

シベリア総督マトヴェイ・ガガーリンの処刑にまつわる逸話である。ガガーリンは金の違法貿易によって巨万の富を築いていた。事件の追跡にあたった連隊長は、ガガーリンがエカテリーナに宝石を贈ることによって後援を得ていることを知り、恐れをなして調査を打ちきる。事件の真相が明らかになったとき、ピョートルは、ガガーリンを絞首刑に、連隊長を銃殺刑に処し、エカテリーナをぶちのめした。

「いやあ、アクセサリーときたか……――ゲラスキンはうっとりとして（с восхищением）いった」（183 頁）

「残酷さ」は、もはや「恐怖」（ужас）ではなく、「感嘆」「恍惚」「歓喜」（восхищение）を呼び起こすのだ（この小説のためにいえば、チェリューキンが「復讐する者の側の正義」

に立ってしまっていることは致命的である)。

このように、グラーニンの小説の「鏡」が映し出す人々の意識の中では、今の世の不正を糾し、盗人どもを罰するためならば、「残酷さ」を受け入れる用意ができている。

問題は、『夜話』が、そうした読者の欲望にどのような大義名分を与えるかである。

『夜話』は、ピョートルの「残酷さ」をいかに正当化するのか？

それは、銃兵隊の乱の逸話ですでに予告されていた「祖国への奉仕」という思想によってである。

> 「彼（ピョートル）には非道なところはなかった。彼がなした悪行を見渡しても、そこに非道を見ることはできない。祖国のイデー（идея Отчизны）がピョートルの心をがんじがらめにしていたのだ。どう結論を出したらよいのか、分からない。わたしは彼が好きだ、自分でも恥ずかしいぐらい好きだ。彼は人殺しだ――でも好きなんだ、崇拝しているんだ。彼のために弁明したい、でもわたしにそんな権利はない。彼を裁かなければならない、でもわたしにはそんなことできない」（221 頁）

モロチコフは雄弁家である。彼は、慎ましい外見の下に民衆扇動家の顔を隠している。

実際、見事な詭弁のレトリックである。彼はまず、ピョートルには「悪行」(преступление) はあったが、「非道」(злодейство) はなかったと、「残酷さ」について道徳的弁明を行なう。ロシア語のどの辞書を見ても、この二つの語は同じ意味であり、こんな言い方が成り立つはずないのだが、聞く者は疑いを挿む間もなく彼の言葉に酔わされてしまう。

次に、「祖国のイデー」というキーワードが、最初はそれを肯定するでも否定するでもなく、用心深く持ち出される。共産主義を騙った国家主義に痛めつけられた 20 世紀ロシアの歴史を思えば当然の配慮だろう。彼は、「少なくともピョートルに残酷な行ないをさせたのは国家を思う心だったのだ」という言い方をする。それから彼は、調子を一変して、聞く者の感情に訴える。

だが、音声を除いて字幕だけ見れば、そこでいわれているのは恐ろしいことである。彼は人殺しを愛し、崇拝すると宣言しているのだ。権利がないといいつつ、弁明を行なうつもりであり、裁く気はないといいきっているのだ。

シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』におけるブルータスの演説を思わせる雄弁によって、モロチコフは「わたしたち」の心をつかみ、『夜話』はモロチコフ師とその弟子たちのピョートル教集会のようになってゆく。

やがて、「祖国のイデー」が、誰からも反論されることなく「残酷」の弁明に接続される。

引用は、皇太子アレクセイの死について語られる部分だが、この章が「生贄」と題されているのは示唆的である。

> 「何が彼（ピョートル）を正当化したのだろうか？
>
> 時の流れとともに、祖国のイデー（идея Отчизны）がますます彼の心を占めるようになったのだ」（251 頁）

要約しよう。

本書の目的は、新しい時代の新しい理想を示すことである。グラーニンは、それを新しいピョートル像として描く代わりに、「祖国のイデー」に奉仕する、強力で苛酷な改革者の肖像として描いた。

実はピョートルが重要なのではない。重要なのは、改革は良いことか、それとも悪いことかという問いに答えることである。グラーニンは、改革は良いと答える。そしてピョートルの物語を借りて、この 15 年間のロシアの改革のプロセスをすべて肯定するのだ。

これが本書の隠れたテーマだ。

このように読むと、各所に、そのときどきの為政者への挨拶が含まれているのが見えてくる。

たとえば、物語前半における改革の議論の中に「加速」（ускорение）という言葉が出てくる。西欧志向は、イヴァン雷帝から始まっており、アレクセイ・ミハイロヴィチ帝が引き継ぎ、ピョートルはそれを「加速」したのだ、と。（57 頁）

この「加速」（ускорение）という言葉は、ゴルバチョフがペレストロイカを始めたときに、最初に掲げたスローガンである。

また、若き日のピョートルを物語るところで、従来のピョートルのあだ名「大工皇帝」（царь-плотник）に代わるものとして、「技術者皇帝」（царь-инженер）という名が贈られるが（48 頁）、ここで思い出されるのは、エリツィンの本職が技術者であったことだ。

ピョートルの痛飲の擁護は、そのままエリツィンの痛飲の擁護となる。

さらに、ピョートルの取巻きはエリツィンの取巻きに重ねられる。どこかチュバイスを思わせるといわれるメンシコフは、その様々な罪にもかかわらず、「でも彼はよく働き、何よりもピョートルを深く愛していたのだ」（265 頁）ということで許される。

そもそも「祖国のイデー」（идея Отчизны）という言葉自体が、エリツィンの唱えた「国家のイデー」（государственная идея）からとられているかもしれないのである。

そして今、クレムリンのプーチンの執務室にはピョートルの肖像が飾られている。

グラーニンは、結局、A.H.トルストイのひそみに倣ったのだ。

しかし、それだけならともかく、グラーニンはピョートルを現代的に潤色するにあたって、ひとつの反則を犯している。

それは、「ピョートルと宗教」というテーマの扱いである。

ゴルバチョフが自分の母親は信者であると告白して以来、改革の時代にロシア正教は新たな流行となった。エリツィンは教会に通い、プーチンは家族を火事から救い出す体験をしてから熱心な信者になったと語っている。グラーニンの描く改革者の肖像にも、宗教の絵の具が必要になるのだ。

一方で、「ピョートルと宗教」というテーマは、長いあいだ触れてはならない禁忌であった。プーシキンはこのテーマを避けたし、A.H.トルストイはテーマそのものを取り上げる必要がなかった。したがって、これは「ピョートルと女性たち」というテーマに続く、グラーニンの小説の新味なわけだが、その扱いはあまりにも疎かである。というのも、そこではピョートルがアプリオリに信者だとされているからだ。

皇太子ピョートル・ペトローヴィチの変死の逸話を例にとろう。

アレクセイの死後、ピョートルは幼いピョートル・ペトローヴィチにすべての期待をか

けていた。だが、新皇太子は三歳にして変死した。モロチコフは、当時の私信を調査した結果、皇太子が球電に撃たれて死んだことを明らかにする。さらに、皇太子の居城には三年前にも球電が現れていたことが分かる。しかし、同じ場所に球電が続けて発生するのはきわめてまれなことである。チェリューキン教授は、ピョートルが事件を「神罰」として受けとめたはずだと述べる。
［球電：電光の一種。雷雨のときにまれに現れて、赤黄色の光を放ちながら中空をゆっくり移動する球状のもの］

「モロチコフは、人が変わったように興奮して教授に飛びかかった。彼は、この話に我慢がならないようだった。――なるほど神は全能であるとしよう。が、それならばなぜ、神はピョートルに、彼の罪を明らかにしなかったのか？　こんな仕打ちで報いることが神意なのか？　たったひとりの息子を奪い、父親を絶望へ突き落とすなんて！　神は人には許すことを教えながら、自分では……彼は涙声だった、まるで自分の親族について話しているかのように。
――ピョートルはそう考えなかった。――と教授は哀れむようにいった。――信仰を持たない人間には信仰を持つ人間を理解するのはむずかしい。まして、それが別の時代の人間ともなれば。わたしは歴史家じゃないし、信仰がどう変化したか知らない。このわたしだっていくぶん信者だ、といって教会の信者ではなく、わたしのは大自然を前にした畏怖といったところだがね。この奇跡は、超自然的な淘汰によって、やっぱり造物主によって創造されたのだという気がするよ。まあ、それはよいとして、ピョートルはね、どれほど彼が偉大な専制君主であろうとも、自分の無力さ、取るに足らなさを感じたのだと思うよ。もっとも彼の性格では、従順にはなれなかったかもしれん。だが、おのれの敗北は認めざるを得なかったろう。
――何に敗北したというのです？
――神を理解することなどできないということにだよ。――教授は、いつになく真面目に、どこか悲しげに答えた」（298 頁）

教授はもう陥落している。「あわれみ」がとりついたのだ。
ともあれ、改革者は信者であることが決まった。新しい時代の新しい理想とは、神をうやまい、「祖国のイデー」の名において改革を断行する、強力で苛酷な改革者を持つことである。
「信仰」と「残酷」の矛盾は、「祖国のイデー」の中でイデオロギー的に解消する。
改革の見本はピョートルである。新しい時代の改革者は、今の世の不正を糾し、盗人どもを罰するだろう。「祖国のイデー」の名において、彼は「残酷」になることを許されている。「祖国のイデー」のためならば、妻を辱め、息子を殺してもよい。見本はピョートルなのだから。
こうして『夜話』は、密かに扇動の書となる。
本書は、改革派の作家による新しいピョートル物語というだけでなく、ピョートルの助けを借りて現行の改革を断行させようとする意図を秘めた、指導部への熱いエールであり、降霊術にも似た呪いなのである。

## ２－５　ピョートル崇拝への通過儀礼

プロパガンダの鉄則は、イデーを押し付けるのではなく、選び択らせることである。選択にいたる道のりには紆余曲折があってよい。むしろ、迷わせてから選ばせるほうが効果的である。帰依者は、「みずから選んだ」信念に忠実であり続けるだろう。

グラーニンは、ピョートルの伝記から不愉快な逸話を取り上げることで、読者に揺さぶりをかける。「ピョートルを理想に掲げたくなければ、掲げなくてもいいのだ」というぐあいに。もしかすると、そこにはピョートルに対する自発的な態度を決定できなかった作者の負い目や、ドイツ系ユダヤ人としての冷めた眼差しが投影されているのかもしれない。このような揺さぶりが、同じイデオロギー的志向を持ちながら、グラーニンの小説を A.H. トルストイの小説から分けているところである。

だが、よく見れば、不愉快な逸話はみなモロチコフ師の雄弁によって「弁明」されているのだ。

本質的にピョートル崇拝への通過儀礼にほかならない『夜話』において、読者が最後の試みにあうのが、終章「最後の愛」である。

グラーニンは、ピョートルに人生を台無しにされた女性の口を借りて、「祖国のイデー」に非難を浴びせる。

ピョートルは、アレクセイとピョートル・ペトローヴィチの二人の皇位継承者を失ったが、実は、彼の知らないところで、もう一人の皇位継承者を殺害されていた。その母后となるはずだった人は、詩人カンテミールの姉マリヤ・カンテミールである。折から、ピョートル・ペトローヴィチを失い、またモンスとの密通も悟られたエカテリーナは、ピョートル死後の自分の身を危ぶみ、彼の身分ある恋人が妊娠したことを知ると、機密調査官房長ピョートル・トルストイと謀って、カンテミール家の侍医にマリヤを堕胎させる。やがて、マリヤは侍医から事の真相を明かされ、生ける屍と化す。モロチコフの遠い先祖で、ピョートルに関するアネクドートの蒐集家だったヤコブ・シテーリンは、彼女の噂を知り、老公爵婦人を訪ねるが、そこで彼が聞いたのは、ピョートルのかつての恋人の身の毛もよだつ告白だった。

> 「彼女は、肘掛けに手をついてゆっくりと身を起こし、彼の上にそびえ立った。背が高く、透き通って、幽霊のようだった。物言わぬ老婆たちもいっしょに立ち上がった。火影が揺らめき、公爵婦人の痩せて骨張った顔が闇に沈んだかと思うと、突然、醜くゆがんで憎悪を剥き出した顔が現れた。だがいっそう恐ろしかったのは、彼女の死人のような白い唇が発した言葉だった。シテーリンは、それを友への手紙に書く勇気がなかった。犯人は陛下だというのだ！　彼には息子などひとりもいなかった、いたのは皇位継承者だけだ。だから彼は、最初の息子を生贄にして殺したのだ。だから彼は、最後の息子も殺されたのだ。人々は、彼女に薬を盛って、皇位継承者を処分した。でも、それは皇位継承者ではなくて、彼女の子供だったのだ。ピョートルは彼女の子供がほしかったのではない、彼には皇位継承者が必要だったのだ。
>
> 彼女は指でピョートルの肖像を突ついて、シテーリンにたずねた。一体、この権力や、くだらない宮廷や、玉座が、こうした犠牲に価するかと。あれは本当に愛だった

のか？　人生が終わろうとする今、彼女にはもう、彼が自分を愛したのか、それとも皇位継承者を得ようとしただけなのか、分からなかった。

陛下は、彼女の仕合せを奪った。彼のせいで、彼女は孤独にむなしく生きねばならなかった。

尖った爪がピョートルの顔を引き裂いた。暖炉では、ピョートルの知られざる感情を記録した、唯一の、かけがえのない証拠が、身もだえし、灰になっていった……「この国に生きるのは恥だ」と、彼女はいった。そしてひとり言のように続けた。「でも、他の場所では生きられない」

すべてが恐ろしかった。彼女をとめられなかったことも恐ろしかった」

（424－425 頁）

グラーニンの創作したこの逸話を読んで、感じやすい読者は涙ぐむだろう。公爵婦人があわれだと。だが、聞いてみるがよい。彼らはこう答えるのだ。それに、ピョートルがあわれだと……

## ３．　結び

『ピョートル大帝夜話』は、この 15 年間にロシアで何が起こったかの証言であり、これから何が起こり得るかの予言である。本書は、その小説的失敗やイデオロギー的な恣意性にもかかわらず、否、むしろそれゆえにこそ、21 世紀のピョートル物語の嚆矢として、今後のロシア文学における重要性をましてゆくであろう。

〈参考文献〉

Исимова А.О. История России в рассказах для детей. – М.: Россич, Ада, 1994.

Петр Великий в преданиях, легендах, анекдотах, сказках, песнях. – СПб.: Академический проект, 2000.

Пушкин А.С. История Петра. – М.: Языки русской культуры, 2000.

Толстой А.Н. Петр Первый. – М.: Правда, 1975.

Тынянов Ю.Н. Восковая персона // Сочинения. Т.1. – М.: ТЕРРА, 1994.